

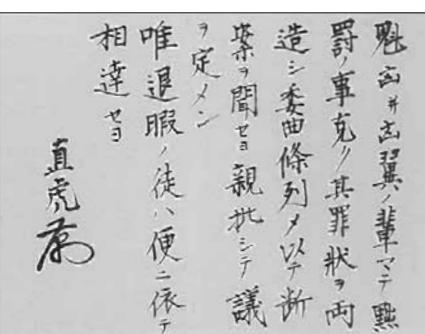
## 幕末の動き

年	出来事
嘉永6(1853)年	ペリー来航
安政元(1854)年	日米和親条約
安政5(1858)年	▼日米修好通商条約 ▼安政の大獄(~59年)
万延元(1860)年	桜田門外の変
文久3(1863)年	薩英戦争
元治元(1864)年	▼池田屋事件 ▼長州征討(1次) ▼四国艦隊下関砲撃事件
慶応2(1866)年	薩長同盟
慶応3(1867)年	▼長州征討(2次) ▼大政奉還
慶応4(1868)年	▼王政復古の大号令 ▼鳥羽・伏見の戦い ▼五箇条の御誓文 ▼江戸城開城

須坂藩13代藩主・堀直虎は、天保7(1836)年、11代藩主・直格の子どもとして江戸(亀戸下屋敷)で生まれました。直虎が生を受けた頃の日本は、長い鎖国時代を経て世界情勢の動きの中に大きな変革を予感させる時代でした。生まれる約10年前には「異国船打ち払い例」が発せられ、生まれた2年後には、渡辺喜山や高野長英など外国船の打ち払いに反対した人たちが罰せられた「蛮社の獄」が起きました。また、資源と商品を求めてアメリカによる開国要求が強まっていました。

直虎は、幼い頃から賢く、学問や武芸に励みました。当時の大名家の教育は厳格なもので、漢学(中国の儒学)や国学、武術、英学、蘭学などを学びました。

嘉永6(1853)年、直虎が17歳の時に、アメリカのペリーが乗つた黒船が浦賀沖に来航しました。その頃直虎は、蘭学や西洋式の兵学砲術を学び、特に兵学砲術の師だった南郷茂光と上田藩士・赤松小三郎から大きな影響を受けっていました。直虎は、南郷が著した書の序文を書き、直虎自身が「英國騎兵連兵書」の翻訳に取り組んだといわれています。この頃須坂藩は、軍制にオランダ式を取り入れ大砲を備え、鎌田山に据えて試射を行なっています。兵学を学んだ直虎は、当時の須坂藩主(12代)だった兄の直武に、西洋式を充実させることを「警備」を進言しました。直虎は衣服も西洋風に改めました。



▲直虎が家臣の丸山次郎本政に送った文書…藩政改革で罰せられた家臣の罪状を報告するように指示している(博物館蔵)

## ■生い立ち



▲『図譜』…直虎が序文を書き写本したといわれている桜の図譜(博物館蔵)

直虎は、幼い頃から賢く、学問や武芸に励みました。当時の大名家の教育は厳格なもので、漢学(中国の儒学)や国学、武術、英学、蘭学などを学びました。

嘉永6(1853)年、直虎が17歳の時に、アメリカのペリーが乗つた黒船が浦賀沖に来航しました。その頃直虎は、蘭学や西洋式の兵学砲術を学び、特に兵学砲術の師だった南郷茂光と上田藩士・赤松小三郎から大きな影響を受けっていました。直虎は、南郷が著した書の序文を書き、直虎自身が「英國騎兵連兵書」の翻訳に取り組んだといわれています。この頃須坂藩は、軍制にオランダ式を取り入れ大砲を備え、鎌田山に据えて試射を行なっています。兵学を学んだ直虎は、当時の須坂藩主(12代)だった兄の直武に、西洋式を充実させることを「警備」を進言しました。直虎は衣服も西洋風に改めました。

▲直虎が家臣の丸山次郎本政に送った文書…藩政改革で罰せられた家臣の罪状を報告するように指示している(博物館蔵)

## ■誕生と時代背景

## 堀直虎はどのような人物だったのか①

直虎の漢学の師は、亀田鶯谷とい

う漢学者でしたが、「和魂漢才」(漢学

を学んでも日本的心を忘れてはなら

ない」を説き、この影響を大きく受

けていたといわれています。

書道は、「幕末の三大書家」とい

った市川米庵に師事して腕を磨きました。直虎の書は、現在も各所に残

ります。その能筆ぶりを目にすることができます。

直虎は、江戸にその名を知られた

直心影流で修行するなど、学問や文

武に励み青年期を迎えるました。

嘉永6(1853)年、直虎が17歳

の時に、アメリカのペリーが乗つた

黒船が浦賀沖に来航しました。

その頃直虎は、蘭学や西洋式の兵

学砲術を学び、特に兵学砲術の師だ

った南郷茂光と上田藩士・赤松小三郎

から大きな影響を受けっていました。

直虎は、南郷が著した書の序文を書

き、直虎自身が「英國騎兵連兵書」の

翻訳に取り組んだといわれています。

この頃須坂藩は、軍制にオランダ

式を取り入れ大砲を備え、鎌田山に

から大きな影響を受けっていました。

直虎は、南郷が著した書の序文を書

き、直虎自身が「英國騎兵連兵書」の

